

原著論文

保育者養成課程における授業改善を目的とした 振り返り課題の修正効果に関する継続的検証 — 「音楽表現領域指導法」の授業における 「学びのポイント」および「授業内容の活用」の学生の記入内容の分析 — **A Follow-up Validation Study on the Impact of Modified Reflection Assignments Aimed at Improving Teaching Quality in Early Childhood Teacher Education Programs: An Analysis of Student Reflections on Key Learning Points and Application of Lesson Content in a Course on Teaching Methods for Musical Expression**

越智光輝 国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

本研究は、保育者養成課程における授業改善を目的として、「音楽表現領域指導法」の授業における振り返り課題（リフレクションシート）の修正効果を継続的に検証するものである。令和7年度に当該科目を履修した学生を対象に、授業1回目に提示した修正を行った振り返り課題の記入内容を分析し、「学びのポイントを見過ごしている学生の割合」および「授業内容を活用している学生の割合」について明らかにした。

振り返り課題の修正前には把握することができなかった「学びのポイントを見過ごしている学生の割合」が明らかとなり、授業内容を活用している学生の割合も85.7%以上と修正前の33.3%と比較し高まる傾向が見られた。これらの結果は、振り返り課題の修正が学生の理解促進と内省の深まりに有効であったことを示している。また、学びのポイントの選択によって、保育者としての視点や活動設計に違いが生じることが示唆され、教育実践における多様な学びのあり方が浮き彫りとなった。

キーワード:保育者養成、授業改善、音楽表現、振り返り課題、継続的検証

1.はじめに

授業改善や授業の質向上に関しては、保育者養成課程に限らず、教育現場全体で様々な研究や取り組みが行われている。保育者養成校である国際学院埼玉短期大学（以下、本学）においても、授業改善を目的とした Faculty Development（以後、FD）や授業公開週間^{注1}などを継続的に実施している。

本学における幼稚園教諭二種免許状および保育士資格の取得に必要な必修科目の一つに、筆者が担当する「音楽表現領域指導法」がある。当該科目では、授業ごとに、授業内容の整理を通じて学生自身の学びを深めることを目的とした振り返り課題（リフレクションシート）に取り組ませている。先述した FD や授業公開週間に加え、筆者は、授業の回における「学びのポイント」を見過ごしている学生の実態を把握するための設問の検討を目的とした、令和4年度の当該科目授業1回目の振り返り課題の学生の記入内容の分析（越智

2023) や、令和 5 年度の当該科目授業 1 回目の振り返り課題から、「授業内容を活用している学生」^{注2}の割合を高めるための方策の検討を目的に記入内容の分析を行った(越智 2024)。その結果、授業の回における「学びのポイント」を見過ごしている学生の実態の把握に振り返り課題の学生の記入内容を活用するためには、振り返り課題の項目や質問内容について再度検討する必要があること(越智 2023)、振り返り課題記入前に「学びを活用する対象」「対象に対しての行動」「行動によって得られると予想される結果(成果)」これら 3 つの視点を用いて振り返り課題の記入に関する指導を行うことで、振り返り課題の記入内容は、さらに多くの視点から、より具体的な内容に変化すること(越智 2024)が明らかとなつた。越智(2023)・越智(2024)にもとづき振り返り課題の課題 1 および課題 3 の修正を行い、令和 6 年度より当該科目において修正後の新たな振り返り課題の提示を実施した(表 1)。

表 1 当該科目授業 1 回目の振り返り課題の質問項目の変化

年度	課題内容
2022(令和4)	第1週の授業で学んだこと、感じたことをこちらに直接入力して下さい。
2023(令和5)	第1週の授業について、下記①～④を入力してください。④については、特になれば、「特になし」と記入してください。 ①印象に残った学び ②学びを通じて感じたこと ③今回の学びを、将来、どのように活用するか ④質問
2024(令和6)	第1回の授業について、下記の課題1～3を直接入力して下さい。 課題1. 今回の授業における学びのポイントの数と内容を記入して下さい。 ※記入例 ↓ 課題1 学びのポイント 2つ (1) □・(内容を記入) ······ (2) □ × × (内容を記入) × × × 課題2. 今回の授業で印象に残った学びと、印象に残った理由を記入して下さい。 課題3. 課題1で記入した学びのポイントから1つ選び、将来、保育者としてどのように活用するか、考えを記入して下さい。活用の内容については、①対象者、②対象者への具体的な活動(行動)、③活動(行動)を通じて得られる成果、①～③の視点から記入して下さい。 ※記入例 ↓ 課題3 活用する学びのポイント (2) × × × (内容を記入) × × × ○○を対象として、△△△△を行いたい。この行動を通じて、◎◎◎◎の成果が得られると考えられる。
2025(令和7)	2024(令和6)年度と同様

保育者養成課程における音楽表現の指導法に関する研究については、実技指導の方法や教材の工夫に関するものが多く、学生の学びの過程や内省に焦点を当てた研究は少ない。田中(2020)によると、ピアノ・歌唱・音楽理論に関する指導法や、表現技術の向上に関する研究、音・音楽を創り出す授業実践に関する研究は、それぞれ 3～4 割程度を占めてい

るのに対し、授業改善に焦点を当てたものは 2 割に達していないとしている。学生の学びの過程や内省に焦点を当てた研究の 1 つと考えられる横山（2018）においても、学習環境の構成要素としてのリフレクションツールが学生の多様な気付きを促す要因としては機能していたが、アセスメントシートの記述だけでは、学生がどのように学んでいるのかを捉えることはできないとされており、保育者養成課程における音楽表現の指導法に関する授業内容について、学生の理解や実践意識の可視化は、授業改善に活かす視点を獲得するための重要な取り組みの 1 つだと考えられる。

そこで本研究では、令和 6 年度に実施した振り返り課題の修正効果を検証することを目的に、修正後の新たな項目である「学びのポイント」と「授業内容の活用」に着目し検討することとした。

これらの検討を通じて、学生の学びの過程や内省の深まりを可視化し、授業改善に資する具体的な知見を得ることを目指す。特に、学生が授業内容をどのように受け止め、どのように実践に結びついているかを把握することは、教育の質向上に直結する重要な視点である。さらに、本研究で得られた知見は、音楽表現領域に限らず、他の保育科目や教育分野への応用可能性を持っており、FD や授業公開週間と連動した授業改善の取り組みとして、教育組織全体の質的向上にも寄与することが期待される。

2. 方法

2-1 対象者

令和 7 年度に本学幼稚保育学科で 2 年次前期開講科目である音楽表現領域指導法を履修した学生 45 名を対象とした。

2-2 調査時期および調査方法

「教職員ポータルサイト」のメニュー「ポートフォリオ」の「学習ポートフォリオ一覧」^{注3}に提示した振り返り課題について、授業 1 回目（学籍番号前半・2025 年 4 月 7 日、学籍番号後半・2025 年 4 月 9 日）の授業終了 10~15 分前に閲覧するよう対象者に指示した。振り返り課題の提示については授業終了時刻 20 分前に閲覧可能になるよう登録をし、提出の締め切りは授業翌日までとした。

2-3 調査内容および分析方法

先に示した表 1 の令和 7 年度版の振り返り課題 3 項目のうち、課題 1 および課題 3 について分析を行った。

越智(2023)に基づき修正を行った課題 1「今回の授業における学びのポイントの数と内容を記入して下さい。」では、当該科目授業 1 回目に提示した 4 つの「学びのポイント」（表 2）の内容について、誤字脱字等がなく記入できているポイント数について分析した。

また、越智(2024)に基づき修正を行った課題 3「課題 1 で記入した学びのポイントから 1 つ選び、将来、保育者としてどのように活用するか、考えを記入して下さい。活用の内容については、①対象者、②対象者への具体的な活動（行動）、③活動（行動）を通じて得られる成果、①～③の視点から記入して下さい。」では、選択した「学びのポイント」ごとに、

①対象者、②対象者への具体的な活動（行動）、③活動（行動）を通じて得られる成果、これら①～③の記入内容について分析した。

令和7年度版の振り返り課題の配点は、令和6年度版の振り返り課題と同様に、課題1問につき1点（合計3問で3点満点）とし、記入内容や誤字等の有無に応じて0.25点刻みで1～0.25点のいずれかの評価を行った。提出遅れの場合は、1点相当の内容を0.5点、0.75点相当の内容を0.25点、0.5点以下相当の内容は0点に減じて評価した。令和4年度および令和5年度版の振り返り課題の配点はどちらも2点満点で、記入内容に応じて、2点、1.5点、1点、提出遅れは一律0.5点で評価していた。

表2 1回目授業内で提示した4つの「学びのポイント」

学びのポイント
1. 「1 ねらい」「2 内容」における3歳以上と3歳未満での特長について記述することができる。
2. 「受容」と「表出」について、自らの考えを記述することができる。
3. 「受容と表出」に関する「自らの考え方と他者の考え方」の相違点から感じたことを、記述することができる。
4. 「印象の違い」が生じる理由について、仮説を記述することができる。

2-4 授業の内容

令和7年度1回目の授業概要を図1に示す。まず、当該授業のシラバスと授業の流れを伝えた後（図1-1、図1-2）、この授業回での「学びのポイント」を提示した（図1-3）。その後、当該科目における評価基準の説明を行った（図1-4）。

次に、領域「表現」の「ねらい」「内容」「内容の取扱い」について、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領それぞれにおける3歳以上と3歳未満での違いについて、「受容・インプット」「表出・アウトプット」^{注4}の観点から学ぶ機会を設けた（図1-5）。これらの観点からの学びをふまえ、教科書に掲載されている課題（以後、授業内課題）に取り組むよう指示した（図1-6、図2¹⁾・3²⁾）。

授業内課題への取り組み終了後に、この授業内課題で学んだ「受容・インプット」と「表出・アウトプット」における個人差を実際に感じることを目的に、「たなばたさま」のメロディーに「ファラド→シレファードミソ→ファラド」と伴奏づけを行った演奏と「ファラドミ→シレファラードミソシ→ファラドミ」と伴奏づけを行った演奏を実際に聴いた際の印象が、自分と他者とでどのように違いがみられるか明らかにする実験を行った（図1-7、譜例1）。

授業の最後に、次回の授業に向けての説明を行い、振り返り課題を提示した（図1-8）。

令和7年度における当該科目1回目の授業の概要は、令和4年～6年度と同様である。

1	2
<p>第1週</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ テーマ 音を聞くことによる受容と表出 ■ 内容 表現の領域における「ねらい」「内容」「内容の取扱い」に関するグループワーク 	<p>授業の流れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 評価についての説明 ② 「1ねらい」「2内容」における3歳以上と3歳未満での特長 ③ 「受容」と「表出」について ④ 「自らの考え」と「他者の考え」の相違点 ⑤ 「自らの考え方」と「他者の考え方」のグループごとの比較 ⑥ 「自らの印象」と「他者の印象」の比較 ⑦ 字びを深める振り返り課題への取り組み
3	4
<p>第1週の学びのポイント</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「1ねらい」「2内容」における3歳以上と3歳未満での特長について記述することができる。 2. 「受容」と「表出」について、自らの考えを記述することができる。 3. 「受容と表出」に関する「自らの考え方と他者の考え方」の相違点から感じたことを、記述することができる。 4. 「印象の違い」が生じる理由について、仮説を記述することができる。 	<p>① 評価について →ポートフォリオ参照</p> 
5	6
<p>② 「1ねらい」「2内容」における3歳以上と3歳未満との特長</p> <ul style="list-style-type: none"> →3節「音」の聞き方 P.130～131 →表4-3-1 表4-3-2を眺めて、3歳以上と3歳未満で、文意にどのような違いがあるか、感じたことをまとめてみる。 →まとめた内容を、何名かが発表する。 	<p>③～⑤ 「受容」と「表出」について →p.131 課題1に取り組む。誰とも相談せずに1人で取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> →6つのグループにわかれ、グループ内でそれぞれの回答を見せ合う。 →グループ内の回答の特長について、他のグループに発表する内容を相談して決める。 →グループの代表者が発表する。
7	8
<p>⑥ 「自らの印象」と「他者の印象」の比較</p> <ul style="list-style-type: none"> →どのように音を聴いているのか P.133～P.134 →実験に参加 →音の印象について、自分と他者の違いを体験 	<p>⑦ 振り返り課題への取り組みによって 字びを深める</p> <ul style="list-style-type: none"> →次回の授業内容の予告 スマホ充電して持参 →ポートフォリオ参照 提出締め切り・明日 

図1 授業1回目概要

課題 1

表 4-3-2 に記載されている、「教育要領、保育指針（3 歳以上）、教育・保育要領（3 歳以上）」の内容（1）～（8）、「保育指針（1 歳以上 3 歳未満）、教育・保育要領（満 1 歳以上満 3 歳未満）」の内容（1）～（6）について、①受容（インプット）、②表出（アウトプット）、③受容と表出の両方、①～③のどれに関連した内容なのか、その理由もふくめて自分 1 人で考えてみましょう。

次に、複数名で 1 つのグループになって、1 人ひとりの意見を発表し、まわりのメンバーの意見・考えを共有してみましょう。

図 2 授業内課題 1

譜例1

譜例2

譜例 1

-
- (1) 水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。
 - (2) 音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。
 - (3) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。
 - (4) 歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。
 - (5) 保育士（教育・保育要領：保育教諭）等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。
 - (6) 生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。
-

図 3 授業内課題 1 の表 4-3-2

2-5 倫理的配慮

口頭および文章にて、①研究内容および実施計画、②調査によって収集したデータを論文等で活用する、③調査への同意は強制ではない、④同意をしないことで不利益を被ることはない、⑤氏名や学籍番号等個人が特定される情報について公表されない、以上 5 点について説明を行ったうえで、振り返り課題の記入内容について論文等で活用することについて対象者の意志の確認（同意する、同意しない、から 1 つ選択）をポータルサイトにて実施した。また、「音楽表現領域の授業で実施する振り返り課題の記入内容に関する調査」の課題名にて、本学研究倫理審査委員会の承認を得た。

3. 結果

3-1 本稿の対象となる記入者数

振り返り課題の記入内容の論文等での活用について同意の意志を確認できたのは 40 名であり、締め切り期日までに振り返り課題の提出があったのは 35 名であった。

3-2 「学びのポイント」の記入状況（課題 1）

授業で提示した 4 つの「学びのポイント」は、「学びのポイント 1」（「1 むらい」「2 内容」における 3 歳児以上と 3 歳未満での特徴について記述することができる。）、「学びのポイント 2」（「受容」と「表出」について、自らの考えを記述することができる。）、「学びのポイント 3」（「受容と表出」に関する「自らの考え方と他者の考え方」の相違点から感じたことを、記述することができる。）、「学びのポイント 4」（「印象の違い」が生じる理由について、仮説を記述することができる。）である（前掲・表 2）。

振り返り課題 1（今回の授業における学びのポイントの数と内容を記入して下さい。）の記入状況について表 3 に示した。全て（4 つ）の「学びのポイント」を記入できた対象者は 33 名（94.2%）、3 つの「学びのポイント」を記入できた対象者は 0 名（0.0%）、2 つの「学びのポイント」を記入できた対象者は 1 名（2.9%）、1 つの「学びのポイント」を記入できた対象者は 0 名（0.0%）、記入なしの対象者は 1 名（2.9%）であった。

2 つの「学びのポイント」のみ記入した 1 名の対象者は、「学びのポイント 3」（「受容と表出」に関する「自らの考え方と他者の考え方」の相違点から感じたことを、記述することができる。）、「学びのポイント 4」（「印象の違い」が生じる理由について、仮説を記述することができる。）を記入していた。

記入無しの 1 名の対象者は、授業内で提示した「学びのポイント」については全く記入しておらず、表 4 の内容を記述していた。

表3 「学びのポイント」の記入数

記入数	人数(%)
全て(4つ)	33(94.2)
3つ	0(0.0)
2つ	1(2.9)
1つ	0(0.0)
記入無し	1(2.9)
n=35	

表4 記入無しの学生の記述内容

内容
<p>課題1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学びのポイントの数 10 個 <p>(1)音楽を聞くことによる受容と表出。</p> <p>音楽で感動することを受容。</p> <p>共有や演奏することを表出。</p> <p>(2)保育現場の表現活動(音楽)の受容と表出。</p> <p>3歳未満と3歳以上の「ねらい」と「内容」がある。</p> <p>(3)グループワーク</p> <p>答えは一つと思っていたが、グループ内発表で違う解釈があったことに気がついた。</p> <p>(4)グループ発表者</p> <p>発表者をジャンケンで決めた。新しいクラスメイトが、ジャンケンに勝ち発表者になった。その時に、新しいクラスメイトの気持ちを察して、他のメンバーが代わって発表するのは可能だと伝えていた。</p> <p>(5)グループ発表の順番の決め方</p> <p>順番の決め方を指導者の好物を当てることで決める方法。</p> <p>(6)音楽の3要素</p> <p>メロディー、リズム、ハーモニー。</p> <p>(7)ハーモニー</p> <p>心地よく感じる感覚は成長の過程で身につける。</p> <p>(8)音楽の表出</p> <p>日常生活の音楽の受容によって決まる。</p> <p>(9)ピアノ演奏</p> <p>和音の影響。</p> <p>(10)発表の仕方</p> <p>周囲の判断に振り回されない方法。</p>

3-3 選択した「学びのポイント」(課題3 その1)

課題3の内容は、「課題1で記入した学びのポイントから1つ選び、将来、保育者としてどのように活用するか、考えを記入して下さい。活用の内容については、①対象者、②対象者への具体的な活動(行動)、③活動(行動)を通じて得られる成果、①～③の視点から記入して下さい。」である。

対象者が授業で提示した4つの「学びのポイント」から、どのポイントを選択したかについて表5に示した。

表5 選択した「学びのポイント」

選択した「学びのポイント」	人数(%)
1	8(22.9)
2	12(34.8)
3	6(17.1)
4	6(17.1)
未記入	3(8.6)
n=35	

「学びのポイント1」（「1ねらい」「2内容」における3歳児以上と3歳未満での特徴について記述することができる。）を選択した対象者は8名(22.9%、以後、第1グループ)、「学びのポイント2」（「受容」と「表出」について、自らの考えを記述することができる。）を選択した対象者は12名(34.8%、以後、第2グループ)、「学びのポイント3」（「受容と表出」に関する「自らの考え方と他者の考え方」の相違点から感じたことを、記述することができる。）を選択した対象者は6名(17.1%、以後、第3グループ)、「学びのポイント4」（「印象の違い」が生じる理由について、仮説を記述することができる。）を選択した対象者は6名(17.1%、以後、第4グループ)、未記入の対象者は3名(8.6%以後、第5グループ)であった。

4つの「学びのポイント」のうち、「学びのポイント2」（「受容」と「表出」について、自らの考え方を記述することができる。）を選択した対象者の割合が最も高くなった。また、未記入3名のうちの1名は、「学びのポイント」とは全く異なる内容を記述（前掲・表4）していた対象者である。

3-4 選択した「学びのポイント」の活用における記入内容（課題3その2）

選択した「学びのポイント」をどのように活用するか記入した内容について、グループごとに表6～10に示した。表6～10内の「No.」は、人数の把握のために便宜上記載したものであり、学籍番号等の個人を特定するものではない。

なお、表6～10の「記入内容」については、「①対象者」に該当すると考えられる箇所に下線および①、「②対象者への具体的な活動（行動）」に該当すると考えられる箇所に下線および②、「③活動（行動）を通じて得られる成果」に該当すると考えられる箇所について下線および③を、筆者が加筆した。

3-4-1 第1グループ：8名(22.9%)

第1グループの8名全員が、①対象者、②対象者への具体的な活動（行動）、③活動（行動）を通じて得られる成果、①～③の全ての視点から記入をしていた（表6）。

表6 「学びのポイント1」を選択した対象者の記入内容

No.	記入内容
1	1歳児以上3歳児未満①を対象として、 <u>音遊び</u> ②を行いたい。この行動を通じて、水、砂、紙などの音の違いを理解できると共に物によって沢山の音があると考える③という成果が得られると考える。
2	4歳児と2歳児①を対象として、 <u>マラカスやタンバリンなどの簡単なリズム楽器を使い音楽に触れる活動</u> ②を行いたい。この活動を通じて、2歳児では、 <u>聴覚が刺激され音への認識を高める</u> ③成果が得られると考えられる。4歳児では、 <u>手先を使って楽器を振ったり叩いたりすることで手先が器用になる</u> ③成果が得られると考えられる。
3	子ども①を対象として、 <u>ねらい、内容を取り入れた保育</u> ②を行っていきたい。この行動を通じて、 <u>より質の高い保育を行うことができる</u> ③という成果が得られると考える。
4	3歳以上の「ねらい」の特長として、イメージを豊かにし表現を豊かにするということがあるため <u>3歳以上の子ども</u> ①を対象として <u>音楽を聴いて想像したものを絵で表現する活動</u> ②を行っていきたい。絵で表すことで子どもがどのように感じたのか視覚的に分かり、 <u>想像力が養われる</u> ③という成果が得られると考えられる。
5	<u>3歳未満児</u> ①を対象として、 <u>よりシンプルな活動</u> ②を行いたい。 「受容と表出」について学んだ際に、グループのメンバーで「ねらい」と「内容」が「受容と表出」のどちらか、または複合なのかについて話し合った際に、3歳以上児は複合かそうでないかで意見が分かれる場面が多かったのに対して、3歳未満児は「受容と表出」のいずれかという意見が多かった。 そのため3歳未満児にはより意図の分かりやすいシンプルな行動を心掛ける事で、 <u>より活動の目的に沿った</u> ③成果が得られると考えられる。
6	<u>3歳以上児</u> ①を対象に <u>ペットボトルに石やビーズ等の素材を入れオリジナルのマラカスをつくり</u> ②をする。それにより、 <u>入れる素材による音の違いや不思議さ、自分でつくる面白さを感じることができ、表現する楽しさを感じることが出来る</u> ③と考える。
7	<u>3歳未満</u> ①を対象として、 <u>普段の保育中にピアノを使うようにしたいです。(朝のうたなどの他に、静かにして欲しい時に静かな曲を弾く、お片付けの時に早いテンポの曲を弾く。など)</u> ② この行動を通じて、 <u>生活の中には様々な音楽があるということを知ってもらえる</u> ③と考えました。
8	<u>2歳の子ども</u> ①を対象として、 <u>季節の制作活動</u> ②を行いたい。この行動を通じて、子どもたちは <u>自分でやろうとする意欲が高まったり、自分なりに表現したりする力が得られたりする</u> ③と考えられる。

3-4-2 第2グループ：12名(34.8%)

第2グループの12名全員が、①対象者、②対象者への具体的な活動（行動）、③活動（行動）を通じて得られる成果、①～③の全ての視点から記入をしていた（表7）。

表7 「学びのポイント2」を選択した対象者の記入内容

No.	記入内容
1	子どもたち <u>①</u> を対象として、「音楽」を通して、楽しいと思ってもらうことのできる環境作り <u>②</u> を行いたい。環境作りの際には、子どもが身近なものから簡単に音を作ることのできるものを使い、失敗や難しいさを感じることのないような成果が得られる <u>③</u> と考えられる。
2	3~5歳児の子ども <u>①</u> を対象として、 <u>粘土遊びの活動</u> <u>②</u> を行いたい。この活動を通じて、粘土の感触を実際に触って感じたり、身の回りの物や出来事を通して物を粘土で表現したり等、 <u>受容を通じて</u> からの表出を行うことができると <u>③</u> いう成果が得られると考えられる。
3	子どもが保育者と関わること <u>①</u> を対象として、 <u>どの様な場面で受容と表出が現れるか</u> 気になる。 <u>②</u> この行動を通じて、 <u>保育者が子どもに対する関わりがより良いものになる</u> <u>③</u> 成果が得られると考えられる。
4	3歳児 <u>①</u> を対象として、 <u>自然の物(水や落ち葉、どんぐりなど)</u> を使ってマラカスを作ったり、その物に触れたり、音を聴いたりしながら、思い思いに楽しむことの出来る活動 <u>②</u> を行いたい。この活動を通じて、子ども達がそれぞれ好きな音を見つけることが出来たり、今まで知らなかつた音や物に触れて感じ、 <u>自由に感じたことを表現する楽しさ</u> を子ども達自身が気付くことが出来る <u>③</u> と考える。
5	主に3歳以上の子ども <u>①</u> を対象として、 <u>鳥の鳴き声や雨の音、風の音など自然の音に、みんなで耳を澄ませ</u> その音や感じたことなどを言葉にする時間を作りたい。 <u>②</u> 日常の中で様々な音に触れる機会を多く作り子どもたちが受容することで、 <u>楽器の演奏や歌などにおいて表出の幅が広がる</u> <u>③</u> という効果が考えられる。
6	子ども <u>①</u> を対象として、 <u>音楽発表会</u> <u>②</u> を行いたい。この行動を通じて、音楽発表会の <u>練習の成果</u> や <u>子ども同士の協調性</u> が得られる <u>③</u> と考えられる。
7	子ども <u>①</u> を対象として、「遠足での思い出を絵に書く」という活動 <u>②</u> に活かしたいと思います。この行動を通じて、子ども自身が感じたこと、楽しかったことを思い出して自由に表現することで記憶力、表現力を豊かに出来る <u>③</u> と考えます。
8	子ども <u>①</u> を対象として <u>音楽を聞いたり、演奏したり</u> <u>②</u> したい。この行動を通じてクラスのみんなと音楽を聞いたり、演奏して感じたことを伝え合い、 <u>音楽の楽しさを学ぶことが出来る</u> <u>③</u> と思う。
9	子ども3~5歳 <u>①</u> を対象として、 <u>自然観察をし、意見を出し合いたい</u> <u>②</u> です。この行動を通じて、自分たちが感じた、味わったことを他者に伝え、また違った感じ方が取り入れられ、 <u>様々な感じ方</u> を得られる <u>③</u> と考えられると思いました。
10	5歳児 <u>①</u> を対象として <u>合奏の発表会</u> <u>②</u> を行いたい。他の人の演奏をきいてどう感じたか、自分の演奏へどう表現するかといった <u>音楽への興味</u> が高まり向上心が得られる <u>③</u> と考えられる。
11	4歳児 <u>①</u> を対象として、 <u>ペットボトルマラカスの活動</u> <u>②</u> を行いたい。この活動を通じて、ペットボトルの中に石などを入れることによって色んな音がなり、 <u>みんなで楽しく協力出来る</u> <u>③</u> の成果が得られると考えられる。
12	子どもたち <u>①</u> を対象にして、 <u>音楽の活動をする時に身の回りの音を聞き</u> 1人ひとりどのように感じたか聞き、子どもたちがその感情を表現できるような活動 <u>②</u> を行いたいです。この行動を通じて、子どもたちが <u>自分の気持ちや感情を表現出来るようになる</u> <u>③</u> という成果が得られると考えられる。

3-4-3 第3グループ：6名(17.1%)

第3グループの6名全員が、①対象者、②対象者への具体的な活動（行動）、③活動（行動）を通じて得られる成果、①～③の全ての視点から記入をしていた（表8）。

表8 「学びのポイント3」を選択した対象者の記入内容

No.	記入内容
1	3歳以上①を対象として、 <u>楽器遊びの活動</u> ②を行いたい。この活動を通じて、楽器それぞれからどんな音がするのか <u>仲間と話したり、感じたりする成果</u> ③が得られると考えられる。
2	子ども①を対象として、 <u>鬼ごっこ</u> ②を行いたい。この活動を通して、何の鬼ごっこをするかや鬼と逃げを決めるなど話し合いをすることによって、 <u>自分の意見と他者の意見を出し合う力が身につけられる</u> ③と思いました。
3	年長児①を対象として、 <u>好きな楽器を使用して動物を表現する活動</u> ②を行いたい。この行動を通じて、人によって対象の動物に合う楽器選びや、音の大きさや音の出し方が変わってくると考え、保育者が「どんなところが違っていたかな？」などと促すことで、 <u>他者の考え方や感じ方を尊重する心が育つ</u> ③と考えられる。
4	3歳以上の子ども①を対象として、 <u>音楽表現(カスタネット・鍵盤ハーモニカ等)</u> ②を行いたい②。この行動を通じて、 <u>受容と表出に関する自分の考えと他者の考えの相違点を感じることができる</u> ③と考えられる。
5	子ども①を対象として、 <u>決め事の際にクラス全員で話し合う時間を作りたい</u> ②。この行動を通じて、 <u>自らの考えとは違う考えを持っている人がいることを知るきっかけになる</u> ③と考えられる。
6	子ども①を対象として、 <u>子どもの感情を肯定的に受け止めながら、音楽やダンスなど表現活動</u> ②を行いたい。この行動を通じて、 <u>子どもが自己肯定感を高める</u> ③成果が得られると考えられる。

3-4-4 第4グループ：6名(17.1%)

第4グループの6名のうち、5名が①対象者、②対象者への具体的な活動（行動）、③活動（行動）を通じて得られる成果、①～③の全ての視点から記入をしていた（表9）。表9のNo.5は①～③の視点からの記入が無かった。

表9 「学びのポイント4」を選択した対象者の記入内容

No.	記入内容
1	<u>子ども①</u> に対して、 <u>色々な音楽に触れながら自由に感じたことを表現することのできるような活動②</u> をしたいと思う。 この活動を通じて、音楽から子ども自身が <u>より豊かな感性や表現を身につけることができる③</u> のではないかと考える。
2	<u>5歳児①</u> を対象として同じメロディーを弾きながら左手の和音を変えてみたり、 <u>色々なジャンルの音楽を聴いてみたりして色々な音楽に触れる事のできる環境を作れるようにし、どっちがいいかな？や何が違ったかな？と声掛けをしながら子どもたちの意見を大切にして行いたい②</u> 。この行動を通じて、色々な音楽に触れることで、 <u>表現の自由や楽しさを知り、自分なりの表現の仕方が増える③</u> という成果が得られると考えられる。
3	<u>3歳以上の子どもたち①</u> を対象として、 <u>ひとつの音楽で音程を変えて聞かせてどちらの音が好みかを聞きたい②</u> 。この行動を通じて、 <u>それぞれの音の受け取り方の違いを理解③</u> したい。
4	<u>子ども①</u> が「綺麗」と感じる音を受けとめ、 <u>共感する②</u> ことを大切にしたい。そうすることで、子ども自身が「自分の感性が認められた」と感じ、 <u>自信につながる③</u> と思う。また、 <u>自分の「好き」を素直に言葉で伝えられる力を育んでいける③</u> と考えられる。
5	印象の違いが生じるのは受容と表出の捉え方が人それぞれのよう ^に 音の聞こえ方も人それぞれ捉えると思う。音楽の好みが分かれれるのも同じ理由だと考える。
6	<u>子どもたち①</u> を対象として、今回のように <u>音楽を使ってどう思ったか友だちと話してみる機会を設けたい②</u> 。この行動を通じて、 <u>自分がそう思ったらそうではなく一人一人感じ方は違うから個性があるんだよと伝えることができる成果③</u> が得られると考えられる。

3-4-5 第5グループ：3名(8.6%)

4つの「学びのポイント」から1つも選択していなかった第5グループの記入内容について表10に示した。3名全員が、①対象者、②対象者への具体的な活動（行動）、③活動（行動）を通じて得られる成果、①～③の全ての視点から記入をしていた。

表 10 「学びのポイント」を 1 つも選択していなかった対象者の記入内容

No.	内容
1	<u>1歳児①</u> を対象にして <u>音を出しながら手遊び②</u> を行いたい。この行動を通じて、手を叩くと音が鳴るということを知ることができる③。
2	① 対象者 <u>3歳児①</u> 。 ② <u>季節の童謡の伴奏の和音変化を学ぶ活動②</u> 。 ③ 和音変化による伴奏を通して、 <u>心地良い音を感じる③</u> 。
3	<u>幼児①</u> を対象として、 <u>同じ曲をいつもとは違ったリズムで歌ってみる活動②</u> を行ってみたい。この行動を通じていつも歌っているような曲で飽きてきたところでも少し新鮮さを感じることができる③と考える。

4. 考察

4-1 課題 1(学びのポイント)の記入

提示された 4 つの「学びのポイント」の全てを記入した対象者は 33 名であった。この人数は振り返り課題の記入内容の論文等での活用について同意の意志を確認でき、かつ締め切り期日までに振り返り課題の提出があった 35 名の 94.2% に達している。これは、授業で提示した「学びのポイント」について、対象者のほとんどがその内容について正確に把握していたことが示されている。

2 つの「学びのポイント」のみを記入した対象者、「学びのポイント」を記入していなかった対象者は、それぞれ 1 名ずつ (2.9%) であった。課題の提示方法や学生の理解状況に個別の支援が必要である可能性も示唆されている。しかし、授業で提示した「学びのポイント」について 1 つも記入していなかった対象者の記入内容（前掲・表 4）は、課題を作成した筆者の意図とは異なるものの、授業全体の内容を網羅しているだけでなく、授業を通じて得た自らの気づきにもとづき、音楽の受容と表出、保育現場での表現活動、グループワークにおける学び、音楽の三要素や演奏方法など、多岐にわたる内容を記入していた。

4-2 課題 3 (学びのポイントの活用) の記入内容

4-2-1 第 1 グループ

第 1 グループでは、「学びのポイント 1」（「1 ねらい」「2 内容」における 3 歳児以上と 3 歳未満での特徴について記述することができる。）の活用について記入している（前掲・表 6）。このグループのほぼ全ての対象者が、表現の領域における「ねらい」や「内容」をふまえ、3 歳未満では受容を中心とした、もしくは受容と表出のいずれかに焦点をあてたシンプルな活動が、3 歳以上では受容と表出とを複合した活動の記入をしていた。また、活動によって得られる成果の記入のほとんどが、子どもの発達段階に即した内容であり、年齢に応じた表現活動の設計を行い子どもの発達段階に即した成果を引き出す、という実践的な視点が見られる。ただし、表 6 の No.3 の記述については、子どもの年齢や活動内容、活動による成果、これらの全てにおいて記入内容が抽象的であり、このグループの他の対

象者と比較し、授業内容の理解度もしくは自らの考えを記述する能力が低い傾向にあることが推測される。

4-2-2 第2グループ

第2グループでは、「学びのポイント2」（「受容」と「表出」について、自らの考えを記述することができる。）の活用について記入している（前掲・表7）。このグループでは、音楽発表会や遠足、合奏といった、保育の現場で実践されている集団による活動に関する内容や、「受容」と「表出」のプロセスに着目した活動の成果に関する記入がなされており、「受容」と「表出」に対する自らの考えを保育活動に応用しようとする考えが強く示されていると考えられる。

また、このグループでは、対象者の3名だけが具体的な年齢（表7・No.4・3歳児、No.10・5歳児、No.11・4歳児）を明示し、それ以外の対象者は「子ども」や「子どもたち」といった年齢や発達段階に対してより大きな集団を対象とした記入をしていることから、第1グループの記入の特長である「子どもの発達段階に即した成果を引き出すこと」よりも、主に活動そのものによって集団が得られる成果に対しての意識が強い傾向にあると考えられる。

4-2-3 第3グループ

第3グループでは、「学びのポイント3」（「受容と表出」に関する『自らの考え方と他者の考え方』の相違点から感じたことを、記述することができる。）の活用について記入している（前掲・表8）。「受容と表出」に関する自らの考え方と他者の考え方の違いに着目し、それを保育活動に活かそうとする姿勢が見られた。楽器遊びや鬼ごっこ、話し合い活動などを通じて、子どもが他者の意見や感じ方に触れる機会を設けることで、子ども同士、もしくは、子どもと保育者の相互理解や自己肯定感の育成を目指していた。特に、表8・No.3の年長児が好きな楽器を使って動物を表現する活動では、楽器の選び方や音の出し方に個人差があることを認識し、保育者がその違いを尊重する声かけを行うことで、子どもが他者の考え方を受け入れる姿勢を育むことが期待されていた。これは、保育者が多様性を尊重する保育を実践するための基盤となる、重要な視点だと考えられる。

第1グループは子どもの発達段階に応じた成果、第2グループは活動そのものによって集団が得られる成果、といったグループごとによる記入の特長が見られたが、第3グループの記入についても、これら2つのグループと異なり、自らと他者との考え方の相違点に気づくことによって獲得できる成果に焦点を当てている点が、その特長であると考えられる。

4-2-4 第4グループ

第4グループでは、「学びのポイント4」（「印象の違い」が生じる理由について、仮説を記述することができる。）の活用について記入している（前掲・表9）。授業内で体験した、同じ音群（楽曲）を聴いた場合でも自らと全く異なる印象を持つ他者の存在を知るという体験や、その体験から得た学びを、保育活動に応用しようとする姿勢が見られた。同じメロディーを伴奏の和音を変化させて演奏することや、ジャンルの違いを体験させる活動を通じて、子どもが音楽の多様性に触れ、自分なりの「好き」や「綺麗」といった印象を子どもなりの言葉で表現する力を育むことが意図されていた。また、活動そのものに加え、その活動の中心となり印象の違いを生み出す音群（楽曲）そのものに、より意識を向けていると考えられる。

表9のNo.5は、課題3で問われている①～③の視点（①対象者、②対象者への具体的な活動、③活動を通じて得られる成果）について何も記述されておらず、課題の内容を理解していない可能性が示唆されている。

4-2-5 第5グループ

第5グループでは、「学びのポイント」を明示的に選択していないものの、リズムや和音（ハーモニー）を活用した活動を通じて、子どもの興味や関心を引き出す、新鮮さを味わわせる、といった工夫が見られた（前掲・表10）。しかしながら、いずれの記入も、音楽の印象を決定づける際に最も大きな影響を与えるとされる音楽の3要素（メロディー、リズム、ハーモニー）のいずれかについて述べられているが、「学びのポイント」が選択されていないため、意図をもってリズムもしくはハーモニーに関する記入を行ったのか、もしくは、偶然にこれらの語句を用いて記入したにすぎないのか、推測することは困難である。また、それらの活動によって得られる成果に関する記入は他のグループの記入と比べ、いずれも内容が乏しい印象を受ける。

4-2-6 全体の特長

対象者35名のうち、授業の内容を活用している学生の割合は、課題3で問われている①～③の視点が全く記入されていない表9のNo.5のみ授業の内容を活用していないと判断した場合は97.1%、内容が乏しい印象を受ける表10のNo.1～3についても活用していないと判断した場合で88.6%、記入内容が抽象的な表6のNo.3までを授業内容を活用していない学生に含める場合には85.7%となる。いずれの場合においても、対象者の85.7%以上が、授業の内容を活用していると考えられる。

また、第1グループの記入の特長には子どもの発達段階に即した内容、第2グループの記入の特長には保育の現場で実践されている集団による活動や「受容」と「表出」のプロセスに着目した内容、第3グループの記入の特長には自らの考えと他者の考えの違いに着目した内容、第4グループの記入の特長には体験から得た学びを保育活動に応用する内容、第5グループの記入の特長には他のグループと比べ乏しさを感じる内容、がそれぞれ見られることから、「学びのポイント」の選択によって保育者としての視点や活動設計に違いが生じることが示唆されている。

4-3 振り返り課題の修正効果における総合考察

筆者による2023年の調査（越智2023）において、振り返り課題の記入内容を用いて授業の回における「学びのポイント」を見過ごしている学生の実態を把握するためには、振り返り課題の項目や質問内容について再度検討する必要が示された。また、同じく筆者による2024年の調査（越智2024）では、当該科目において授業の内容を活用している学生の割合は33.3%となり、授業の内容を活用していると考えられる学習者は全体の30%程度とする先行研究（舛田・工藤2023）と同様の結果であった。

これらの調査に基づいた振り返り課題の課題内容の修正を経て、本稿では令和7年度版の振り返り課題の課題1および課題3の記入内容の調査を行った。

課題1の記入内容の調査では、授業で提示した「学びのポイント」について、対象者の94.2%がその内容について正確に把握していることが明らかとなった。また、課題3の記入内容の調査においては、舛田・工藤（2023）および越智（2024）における授業の内容を活

用している学生の割合 30%程度と比較し、対象者の 85.7%以上が授業の内容を活用しているという結果となった。よって、越智（2023・2024）による振り返り課題の課題 1 および課題 3 の修正については、いずれも有効な効果があったと考えられる。

一方、課題 3 の記入内容については、岩見他（2016）で述べられている他の事例への応用のための考察については一定の成果があると考えられるものの、園児に対しての具体的な指導（藤井 2019）についての記述は見られなかった。また、課題 3 の記入内容の分析からは、振り返り課題を具体的に書かせることによる認知欲求の高まり（石原・泰山 2020）や、次の学習への課題意識の生成という機能をはたしているかどうか（森脇 2021）については明らかにならなかった。

5. おわりに

本研究では、保育者養成課程における音楽表現領域指導法の授業において、振り返り課題の修正が学生の学びに与える影響を検証した。その結果、提示された「学びのポイント」を正確に記入できた学生の割合は 94.2%に達し、授業内容を活用している学生の割合も 85.7%以上となった。修正前と比較し、いずれの項目においても修正後の割合は高まる傾向が見られた。これらの結果は、筆者がこれまで行ってきた振り返り課題の修正（越智 2023・2024）が、学生の理解促進と内省の深まりに有効であったことを示している。また、課題 3 における記述内容の分析からは、選択した「学びのポイント」によって、保育者としての視点や活動設計に違いが生じることが示唆された。特に、子どもの発達段階への配慮、集団活動における受容と表出のプロセス、多様な考え方への気づき、音楽の印象の違いへの理解など、学生が授業を通じて獲得した視点は、保育実践において重要な意味を持つものだと考えられる。

しかし、「学びのポイント」の不十分な記入や、課題の意図を十分に理解していない可能性のある記入が見られた。他方、筆者の意図とは異なるが主体的な学びによる多様な視点の獲得が示されている記入や、子どもの発達段階への理解の深化や配慮への視点の獲得によって学びのさらなる充実が期待できる記入が確認できた。今後は、個別支援の充実に加え、園児たちに対する具体的な指導に対する記入や、認知欲求の高まり、次の学びへ向けての課題意識を生成するための取り組みについても視野に入れ、対象者の学びの深さと広がりをより包括的に捉える振り返り課題の提示方法を検討していくことが必要である。

本研究で得られた知見は、音楽表現領域に限らず、他の保育科目や教育分野における授業改善にも応用可能であり、今後も、学生の学びの過程や内省を可視化する取り組みを継続し、より効果的な授業設計と教育実践の構築を目指していきたい。

注

1. 令和 7 年度の授業公開週間は、学修効果の向上および授業時間外学習の充足を目指し、その具体的な方策を検討・共有する場とされた。
2. 保育者として保育の現場で、将来、授業で学んだ知識やスキルをどのように活用するか考えができる学生を「授業内容を活用している学生」と定義した。
3. 国際学院埼玉短期大学 「ポートフォリオ」

<https://ccm.kgef.ac.jp/private/management/pfstudy> (2025/07/29 参照)

4. 「受容・インプット」を音楽と触れ合う体験を通じて、嬉しい、楽しい、悲しいといったさまざまな感動を得ること、「表出・アウトプット」を音楽を通じて得た嬉しい、楽しい、悲しいといったさまざまな感動を、仲間や友人と共有することや実際に楽器を用いて演奏して表現してみること、と定義した。

著者の利益相反：開示すべき利益相反はない

引用文献

- 1) 渡邊雄介監修、芳野道子・越智光輝編著、他 (2022) 保育内容「音楽表現」声から音楽へ響きあう心と身体、福村出版、東京、p.131.
- 2) 渡邊雄介監修、芳野道子・越智光輝編著、他 (2022) 保育内容「音楽表現」声から音楽へ響きあう心と身体、福村出版、東京、p.132.

参考文献

- 青本眞二・大和浩子・湯原玲子・下高呂元成 「学校における授業研究の質的向上に関する研究－授業研究充実のためのハンドブック作成に向けて－」
<https://www.hiroshima-c.ed.jp/pdf/kyouzai-handobook/kenkyu04.pdf> (2025/08/25 参照)
- 藤井美津子 (2019) 「保育者養成校における表現指導の取り組み－授業の実践と学生の記録の分析から表現の深まりを目指して－」滋賀文教短期大学紀要 21,pp.1-18.
- 林田和喜・星野由雅・原由喜夫他 (2023) 「受講者の振り返りをもとにした授業改善－教職大学院の授業『教職実践協働運営演習』の場合－」長崎大学教育学部教育実践研究紀要 22. 266-274.
- 廣松ちあき・尾澤重知 (2019) 「内省支援が必要な中堅社員の内省プロセスの特徴の質的研究」日本教育工学会論文誌 42 (4). 297-312.
- 堀哲夫 (2009) 「学習履歴を中心とした大学の授業改善に関する研究－OPPAを中心にして－」山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要 14. 64-71.
- 石原浩一・泰山裕 (2020) 「フィードバックと振り返りが学習者の認知欲求に及ぼす影響の検討」日本教育工学会論文誌 44 (1). 105-113.
- 岩見建汰・伊藤恵・富永敦子・大場みち子 (2016) 「PBLにおける活動過程の可視化と学習者の思考を外化することによる振り返り支援」第 41 回教育システム情報学会全国大会 297-298. <https://fun.repo.nii.ac.jp/records/369> (2025/08/25 参照)
- 金子美里 (2025) 「振り返りにおけるメタ認知的コントロールの有効性の検証－自然で主体的な振り返り活動を目指した学習支援の再構築－」関西福祉大学研究紀要 28. 25-34.
- 桐原礼 (2011) 「幼稚園教諭・保育士養成課程学生の「音楽表現指導法」における学び」千葉経済大学短期大学部研究紀要第 7 号 111-120.
- 岸田孝之 (2018) 「質の高い学びを実現するための授業づくり」山形大学大学院教育実践研究科年報第 9 号 254-257.

- 厚生労働省（2017） 保育所保育指針〈平成 29 年告示〉、フレーベル館、東京。
- 舛田弘子・工藤与志文（2023） 「教職課程履修学生における『評価』の適切性判断－目標の『再意味づけ』に着目して－」札幌学院大学人文学会紀要第 114 号 47-62.
- 簗輪欣房（2020） 「テキストマイニングによる振り返り記述を可視化することの有効性について」桐生大学紀要 31. 143-152.
- 文部科学省（2017） 幼稚園教育要領〈平成 29 年告示〉、フレーベル館、東京。
- 森脇健夫（2021） 「授業におけるふりかえりの実践的研究」三重大学教育学部研究紀要 72 卷 383-397.
- 村上玲子・三島瑞穂（2017） 「保育者養成校における教科目『保育表現技術』の捉え方と課題－音楽担当者の立場からの考察－」人間生活科学研究第 53 卷 21-31.
- 内閣府（2017） 幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈平成 29 年告示〉、フレーベル館、東京。
- 中川華那・片山美香（2015） 「音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究－一人とかかわる力を育むために－」岡山大学教師教育開発センター紀要第 5 号 73-82.
- 中井裕子・笹山万紗代・政時和美・松井聰子（2020） 「手術室見学実習における看護学生の学び」福岡県立大学看護学研究紀要 17 卷 71-77.
- 中野圭子（2025） 「教員・保育者養成課程学生の音楽表現活動に関する一考察－創作活動の事例検討を中心に－」園田学園女子大学論文集第 59 号 75-89
- 野田さとみ（2017） 「保育者養成における総合的表現活動の実践（1）－総合的表現活動の振り返りレポートから－」名古屋柳城短期大学研究紀要第 39 号 17-29.
- 越智光輝（2023） 「音楽表現領域指導法の授業改善にむけた取り組み－振り返り課題における学生の記入内容の分析－」国際学院埼玉短期大学研究紀 51. 23-35.
- 越智光輝（2024） 「音楽表現領域指導法の学びを活用できる学生の割合を高めるための方策の検討－授業改善にむけた振り返り課題の活用の有効性－」国際学院埼玉短期大学研究紀 52. 1-17.
- 小川房子・石田由紀子・兼間和美（2024） 「保育場面と心情の読み取りにおける多様性の要因と保育者の同僚性の構築を目指す試み：保育者の幼少期の経験との関連性を手掛かりに」武蔵野大学しあわせ研究所紀要 7 卷 160-183.
- 清水誠（2023） 「学習履歴表を活用した授業改善－領域「環境」の学習を事例に－」国際学院埼玉短期大学研究紀要 49. pp.1-10.
- 田中知子（2020） 「保育者養成校における領域表現にかかる授業実践の動向－創造性を育む音・音楽にかかる授業内容を探る－」大阪総合保育大学紀要第 15 号 131-144.
- 鶴巻保子（2021） 「保育者養成課程における音楽表現力の深まりを考える－『こども学研究』の視点から－」鹿児島純心女子短期大学研究紀要第 51 号. 69-88.
- 横山真理（2018） 「保育内容の指導法「表現」の授業における学生の気付きを促す学習環境の構成要素－身近な素材による音遊びの授業実践記録の分析を通して－」東海学院大学研究年報 3. 49-59.